

パラスポーツの現状とこれからの展望 —2019 ボッチャ東京カップを事例として—

生涯スポーツゼミナール 1416021 佐々木彩花

1. 研究動機・研究目的

近年、障害者スポーツの競技の競技性が著しく向上していることや、障害者を含め誰もが参画する共生社会への社会的関心の高まりなどから、2020年に東京で開催されるパラリンピック競技大会への注目、関心が高まっている。一方で、未だ障害に対する差別的な考えや障害者が身近にスポーツを行う環境が不十分であるのも現状である。障害者スポーツの楽しさや魅力を一般の人々が感じ体験できる場や身近に障害のある人とかかわれる場が増えれば、日常的に障害者スポーツを行う機会や共生社会に対する考えを深められる機会も増えるのではないかと考える。そこで、本研究では、パラスポーツの認知度、パラスポーツが普及することでも社会へもたらすメリット、障害者の一般スポーツ実施率を向上させるためにはという3つの視点で明らかにしていく。

2. 研究方法

【調査概要】

本研究では、パラリンピック及び障害者に対する意識に関する調査とパラスポーツの現状と社会にもたらされる影響、普及に関する調査を Google フォームによるアンケート調査とインタビュー調査を行った。アンケート調査では若い世代を中心に無差別に拡散するものとした。インタビュー調査では、2019年3月に東京都武蔵野総合体育館にて行われたボッチャ東京カップに出場したうちの2チームを対象とし、インタビュー調査を実施した。2チームのうち1チームは健常者チームであり、1チームは障害者チームに依頼した。また、オリンピック・パラリンピックに向けてパラスポーツの普及に携わる3社にインタビュー調査を行った。

【調査内容】

アンケート調査では、藤田紀昭が2016年に行った「障害者スポーツ、パラリンピックおよび障害者に対する意識に関する研究」の調査項目を援用した(全31項目)。本調査では、これらの質問項目のうち、適応性を欠くと判断した項目を除き、筆者が独自に設けた項目を加え、計23項目によって測定し集計を行った。

3. 主な結果と考察

調査結果により、藤田紀明(2016)の「障害者スポーツ、パラリンピックおよび障害者に対する意識に関する研究」と照らし合わせると、藤田の調査結果よりもパラリンピックやデフリンピックの認知度や障害者スポーツの経験の有る人の割合が高く、2020年に東京で開催されるオリンピック・パラリンピックに向けた取り組みが大きな影響を与えていることが明らかである。障害者スポーツの体験のある人の方がデフリンピックやボッチャ、ゴール

ボールといった障害者スポーツの独自の用語について相対的にみて認知度が高かった。身近に障害者がいるかいないかでは、いる人の方が明らかに障害者スポーツに対する認知度が高く、障害者に対する意識でも肯定的な考えであることが明らかになった。

また、インタビュー調査により、現在パラスポーツの普及活動に関わる企業の方も、障害者スポーツで世界を目指している障害のある学生も、障害者スポーツに触れるきっかけとなった要因は、リオデジャネイロパラリンピックと東京パラリンピックに向けた取り組みであり、テレビやSNSなどの情報資源や体験会等のイベントの開催などがこれからの障害者スポーツを推進していくであろうと考える。また、学校現場でのオリパラ教育も推進されており、障害者スポーツを純粋に楽しむことをきっかけに障害者への見方が変われば、教育を受けた子どもたちの家族や将来の自分の子へとリバースエデュケーションされていくであろうと考えられる。

4. 結論

障害者スポーツの中でも「ボッチャ」という競技は老若男女問わず誰もが平等に楽しめる競技である。リオデジャネイロパラリンピック以降、ボッチャの魅力が広まり多くの人の生活に変化をもたらした。障害のある方との関わり方や潜在能力の高さを知り、一方で障害のある方にとってはスポーツと無縁だった生活が一変し、夢を与える立場にもなり得るように変化した。ボッチャを始めとした障害者スポーツの広がりや、障害の有無にかかわらず人々の多様な在り方を尊重し合える共生社会の実現に大きな影響を与えると考えられる。ボッチャやその他パラスポーツお行える場所や活動している団体はかなり増えてきているが広く認知されていないことが現状である。そこで、企業の方がこれからの課題としているようにメディアやSNSでの発信が情報を拡散していくための鍵となるであろう。また、東京パラリンピックでの活躍がさらに障害のある方への新たな可能性を広げるきっかけになり得ると考える。また、健常者にとってもボッチャがきっかけで新たな交流の場が増えたり障害に対する見方が大きく変化したりしていることからボッチャがこれから発展していくことで、誰にでも生活を豊かにするいい影響をもたらしていくと考える。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本研究では多くの方々にご協力いただきました。心より感謝の意を表させていただきます。研究フィールドの場を設けてくださったボッチャ協会の村上先生、研究対象とさせていただいた企業の方、ボッチャ東京カップ2019に出場した選手の方々、そして多くの方が調査に快く依頼を承諾してくださったことで、有効な調査を行うことができ、様々な考察をすることができました。深く感謝致します。また、お忙しい中ご指導してくださった黒須先生には本当にお世話になりました。先生の、温かいお言葉や熱心なご指導により卒業論文を円滑に進めていくことができました。さらに、ゼミ長をはじめ、ゼミ生たちの存在も卒論を書き上げるうえでとても励みになりました。本当にありがとうございました。